

台湾の学校体育における伝統舞踊の位置づけ
—— 全国学生舞踊コンクールで上演された原住民舞踊に着目して ——

木 山 慶 子・張 瓊 方

The Status of Taiwanese Aboriginal Dance:
Using Performances in the National Student Dance Competition as Examples

Keiko KIYAMA and CHANG CHIUNG FANG

台湾の学校体育における伝統舞踊の位置づけ

—— 全国学生舞踊コンクールで上演された原住民舞踊に着目して ——

木 山 慶 子¹⁾・張 瓊 方²⁾

1) 群馬大学共同教育学部保健体育講座

2) 台湾実践大学

(2020年9月30日受理)

The Status of Taiwanese Aboriginal Dance: Using Performances in the National Student Dance Competition as Examples

Keiko KIYAMA¹⁾ and CHANG CHIUNG FANG²⁾

1) Department of Health and Physical Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

2) Shih Chien University

(Accepted on September 30th, 2020)

I 緒 言

日本における伝統舞踊は、学校体育の表現運動及びダンス領域において学ぶことができる。この領域には、「表現、創作ダンス」「リズムダンス、現代的なリズムのダンス」そして「フォークダンス」の内容があり、この「フォークダンス」に日本の伝統舞踊に関わる学習内容が組み込まれている。

中学校学習指導要領（文部科学省、2017）において、「フォークダンス」の学習のねらいは、「踊り方の特徴を捉え、音楽に合わせて特徴的なステップや動きと組み方で踊ることができるようにすること」であり、「フォークダンスには、伝承されてきた日本の民踊や外国の踊りがあり、それぞれの踊りの特徴を捉え、音楽に合わせてみんなで踊って交流して楽しむことができるようにすることが大切である」と示されている。指導に際しては「日本や外国の風土や風習、歴史などの踊りの由来の知識を踏まえて、踊り方の特徴を捉えて踊ることが大切である。その

ため、民族ごとの生活習慣や心情が反映されている由来や、踊りは文化の影響を受けていることなどを、資料や映像などで紹介するとともに、はじめの段階では踊り方を大づかみに覚えて、次の段階では、難しいステップや動き方を取り出して踊ることができるようにするなどの工夫を行うことが大切である」と記載されている。このように、知識において伝統舞踊を文化として理解するとともに、技能においてそれらの既存の踊りのステップを覚え踊ることが、主な学習内容である。

しかしながら、この「フォークダンス」の授業実践には、問題もあげられる。白波瀬（2018）²⁷⁾は、フォークダンスの授業実践は、他の2種類（創作ダンス・現代的なリズムのダンス）に比べ実践率が低い、授業実践されていても、運動会・体育祭などの学校行事と関連付けて行われることが多い、と指摘している。先述のように「フォークダンス」における日本の伝統舞踊に関わる学習は、伝統文化の学習でもある。江原（2017）⁶⁾は、学習指導要領の理念

である生きる力をはぐくむための方策の一環として、伝統と文化に関する教育を充実させるために平成24年4月から中学校1、2年生の保健体育で「武道」と「ダンス」が必修となったと述べている。つまり、武道とダンス必修化の目的の一つは、伝統と文化に対する教育の充実と考えられ、中でも「フォークダンス」はその目的を達成するための役割を担っているといえる。よって、「フォークダンス」のよりよい授業をめざすため、授業の在り方を検討する必要がある。

一方、隣国台湾の伝統舞踊教育の状況を見ると、台湾の学校教育における伝統舞踊は中国舞踊であり、この中国舞踊は国の重要な伝統舞踊として教育課程に盛り込まれている。この教育課程にある点は、日本も同様である。しかしながら、実際の教育課程での具体的な位置づけや存在感は大きく異なり、台湾では、国の政策として伝統舞踊を継承しようという積極的な考え方がある。

まずは、その台湾における中国舞踊の概観を述べることにする⁹⁾。

1. 戦後の中国舞踊発展の契機

台湾における戦後の舞踊の発展は、軍部から始まった。当時の国防部総政治部主任、蔣経国^{註1)}は、舞踊による軍人の戦闘力向上をめざし、舞踊活動を推進した。また、軍の上将、何志浩は、中国舞踊を発展させることが重要だと提言した。1952年には国防部総政治部「民族舞踊推行委員会」が発足し、翌年2月に「中華民族舞踊大競賽（中華民族舞踊コンクール）」が開催された。

蒋介石にとって、「復興中華文化」こそが肝要の任務であり、中国舞踊を継承することは、軍部だけではなく国民にとっても重要なこととされた。蒋介石は、『民生主義育楽兩篇補述』^{註2)}において、「我が国の辺境地方及び各地の様々な宗族（同一父系親族集団）は優美な舞踊を持っている。よって、私たちは当然これらの舞踊を研究し、発展させる必要がある。そのために、舞踊は国民教育の一環として一般社会に普及するべきである」とした。

1954年には、2回目の「中華民族舞踊コンクール」

が開催され、政府、軍部にわたる主要機関が関わる、いわば、台湾全国民の総動員体制のコンクールとなった。

さらに、1964年、「民族舞踊推行委員会」は「中華民族舞踊学会」と改名され、中国舞踊を中心とする舞踊活動を展開する。「各学校の課外活動を強化し、青少年の心身を適正に発展させるために、民族舞踊（中国舞踊）と土風舞（外国のフォークダンス）を推進すべきである」として、学校教育において「中国伝統舞踊」、「中国民族舞踊」、「外国のフォークダンス」を正課活動とした。こうした国の政策は、学校教育における中国舞踊の位置づけに、非常に大きな影響を与えた²⁹⁾。

2. 移植初期における中国舞踊の特徴と分類

台湾に中国本土から舞踊が移植された初期（1950年～1970年ころ）、多くの中国舞踊が上演され、同時に創作された中国舞踊作品は、以下の三種類に分けることができる。

一つ目は、現代（民国年代以後から1960年代当時まで）の衣裳を着用し踊られた舞踊である。この舞踊は、現代の士、農、工、商など、各階層の人々の労働、歓楽の様子を表現するものであり、フォークダンスあるいは体操形式の群舞であった。また、戦闘力を高めるための象徴的な表現をするものもみられた。

二つ目は、中国古代の伝統衣裳を着用して踊られた舞踊である。これらの衣裳には次の3つがある。①中国古代宮廷や貴族が着用した衣裳、②京劇衣裳、③明、清時代の漢民族における衣裳である。これらを着用し、中国の伝統的な動きや仕草を基にして創作された舞踊である。

三つ目は、中国少数民族の伝統衣裳を着用し、動作も少数民族の所作の特徴をもとに創作された舞踊である。これらの舞踊は、当時、「邊疆（辺境）舞踊」と呼ばれていた。この舞踊は、さまざまな中国少数民族の動きや所作、服装、風俗慣習などから模倣され、創作されたものである。

これらの三つの分類は、1970年からの「中華民族舞踊コンクール」の部門に反映され、その部門は、

①中国現代舞踊、②中国古典舞踊、③中国民俗舞踊、それに④児童唱遊の4つとなった。

3. 台湾における原住民舞踊

台湾には漢民族が移住する以前から先住民が居住しており、一般的に「原住民」と呼ばれている。1990年代以降の民主化の流れの中で、政府は「台湾原住民族」として認知し、平地人（漢民族）に対する「原住民」籍を与えた。2017年現在、台湾政府は台湾原住民として16民族を認定している。①アミ（阿美）、②パイワン（排湾）、③タイヤル（泰雅）、④ブヌン（布農）、⑤タロコ（太魯閣）、⑥プユマ（卑南）、⑦ルカイ（魯凱）、⑧セデック（賽徳克）、⑨ツォウ（鄒）、⑩サイシャット（賽夏）、⑪タオ（達悟）別名ヤミとも呼ばれる（雅美）、⑫クバラン（噶瑪蘭）、⑬サキザヤ（撒奇萊雅）、⑭サオ（邵）、⑮サアロア（拉阿魯哇）、⑯カナカナブ（卡那卡那富）である。

彼らは漢民族とは異なる独特の歌舞文化を持ち、1950年頃には、政府の支援により原住民文化の研究も進められた。李天民(1925-2007)^{23, 20)}は、1949年、南台湾屏東県の三地門に居住する原住民部落に入り、『高山青』と題された山地舞²⁴⁾を振付け、この作品は軍の宣伝活動の一環として利用された。その後も、李天民に加え、高棧などの舞踊家が山地舞の研究に本格的に取り組んだ。高棧は、1952年～1954年にかけて台湾北部新竹地域に点在する原住民部落の舞踊を研究し、1954年に開催された全国教育会に招待され、『萬眾歡騰』『如在天堂』『快樂生活』『伊那魯灣』などの作品を発表した。そして、これらを契機として、1955年以降、原住民舞踊を題材とする作品が中国民族舞踊コンクールで多く上演され、賞を受賞することも増えていった^{2, 19, 22-25)}。

李天民は、原住民舞踊の特徴として、中国古代舞踊の踏み歌と非常に似ており、①下肢の基本ステップは、歩く、走る、跳ぶなどの動作から成り、その動きは単純である、②踊る場所や人数などに限定されない、③多人数が手と手を繋いで一緒に踊ることができる、ことを見出している（伍湘芝、2004）²⁶⁾。

その後1970年頃まで、原住民の舞踊は、皆が交

歓するための舞踊、あるいは民俗観光地の鑑賞舞踊に位置づけられてきたが、1970年に、「郷土教育」が謳われ、原住民の民族舞踊が再び注目を集めるようになった。1978年、劉鳳學は、國父記念館で「台湾山地藝術展—山地歌舞演出」を上演、1987年には台北芸術学院の前身国芸術学院において、阿美族の豊年祭の舞踊を上演した。また、1990年には、国立中正文化センターが「原住民樂舞系列」を開催、1991年には、原住民をメンバーとする「原舞者舞団」が設立されている。さらに1993年、台北民族舞踊団が『雅美族飛魚祭』を上演（写真1及び2）、雅美族の飛魚祭りを題材とする作品を発表している。この作品には、中国舞踊の基礎動作が使用され、「毯子功」の「前滾翻」（前転）や「空翻」（宙返り）などの技法も用いられている。雅美族舞踊の特徴であ



写真1



写真2

る、女性が頭髪を上下、右左に振る技法、男性がステップを踏みながら脚を斜め後方に突き出す技法、膝を揃えて屈伸させる技法がみられる^{3,4)}。

そして、1994年には「台湾原住民原縁文化芸術団」が創設されるなど、台湾原住民の舞踊の優勢は現在にまで継承され、中国本土と異なる台湾舞踊の特色の一つとなっている。

加えて、教育の政策としても、2004年に「原住民族教育法」「高級中学校法」が制定され、台湾教育部は、高校を対象に「原住民芸能クラス設置の相關法令」を頒布した。それに応え、「原住民芸能クラス」として、美術、音楽、舞踊等の教育課程を設置した高校もあり、現在でも多くの生徒が学校教育において原住民舞踊を専門的に学んでいる⁵⁾。

4. 全国学生舞踊コンクール

台湾における舞踊教育に重要な役割を担っているのが「全国学生舞踊コンクール」である。このコンクールは、台湾における唯一の全国的な舞踊の大会であり、日本の文部科学省にあたる台湾教育部によって主催され、小学校、中学校、高校、大学の4部門で実施されている。日本の部活動にあたる学校単位での参加ではなく、それぞれの学校における舞踊学習の成果発表の場として学校単位で参加している。

この大会の第1回開催は2002年ではあるが、その前身は、先述の「中華民族舞踊コンクール」(1952年～)である。これを起点と考えるならば、「全国学生舞踊コンクール」の歴史は、まさに「中華民国」政府が台湾に移った最初期にまで遡りうる。実質的には、「中華民族舞踊コンクール大会」が、2002年以降、「全国学生舞踊コンクール」と改称され、現在まで引き継がれていることになる。

審査対象となる舞踊種目は、①中国古典舞踊、②中国民俗舞踊、③現代舞踊、④創造児童舞踊の4つである。それぞれの内容については、「大会実施要領」^{註5)}によって次のように規定されている⁷⁻¹¹⁾。

①「古典舞踊」：中華民族の歴代の古典型式を含み、伝統文化の内容や伝統文化の風格を表現している舞踊である。祭典舞踊、宮廷舞踊、礼儀舞踊、戯

曲舞踊などを含む。

②「民俗舞踊」：中華民族の各地域の民間の季節の祝い事、風習、芸能などの特徴を表現する作品である。各民族の季節の舞踊、郷土舞踊、原住民舞踊を含む。

③「現代舞踊」：多様な舞踊形式や舞踊技法を用いて、現代の人文思想を表現し、現代の社会の風貌や意識を反映するために作られた舞踊である。

④「創造的児童舞踊」：児童を中心とし、児童たちが生活環境や周りのことの観察により、また、身体での創作探索の過程により表現した舞踊である。

本大会は、予選と決勝からなり、まずは予選が各県(市)で実施され、各舞踊種目における各部門の第1位、または、点数で80点を獲得した作品が決勝大会に進むことができる。

各学校の年間行事の一つとして位置づけられ、大会に向けた取り組みが学校全体で組織的に行われており、優秀な成績を収めることは、学校の名誉に大きくかわる。よって、この大会に向けて作品を創作し、繰り返し練習し、上演することは、台湾における中国舞踊のレベル向上および舞踊教育の進展に大きく貢献していると考えられる。さらにこのうち、原住民舞踊作品は、「民俗舞踊」部門に、毎年継続的に作品が創作され発表されている^{17, 18)}。

5. 研究の目的

以上のように、中国舞踊は、台湾という国全体、および学校教育に強い存在観を示し、さらにそのうち原住民舞踊は、台湾政府の支援により保存され継承されており、今後もその対象となっていくと考えられる。したがって、台湾舞踊教育において権威ある全国学生舞踊コンクールでの中国舞踊における原住民舞踊作品の状況について把握することは、今後の中国舞踊の継承、発展への基礎資料となりうる。また、それは、日本における伝統舞踊教育に示唆を得るものでもある。

よって本研究では、近年の全国学生舞踊コンクールで上演された原住民舞踊作品に注目し、全体の作品の傾向(部門別、上演人数、作品の分類)を明ら

かにすることによって、コンクールにおける原住民舞踊作品の状況を把握することを目的とする。

II 研究方法

1. 研究対象

2013年～2017年に、全国学生舞踊コンクールの決勝大会にて上演された作品である。そのうち、原住民舞踊作品を抽出し、調査対象とした。

2. 調査内容・方法

大会HP(全国学生舞踊比賽資訊網, 2013～2017)¹²⁻¹⁶⁾、現地調査によって、作品数等の資料を収集した。

3. 分析方法

すべての作品を年代ごとに、部門別、上演人数(踊り手の人数)別、に分けてその数を算出し、割合を求めた。

また、題名やプログラム等の資料から、作品をカテゴリーに分類した。

III 結果と考察

1. 部門別

表1は、2013～2017年に開催されたコンクール決勝大会の「民俗舞踊」部門で上演された作品とそのうちの原住民舞踊の作品数を示している。

2013年～2017年の「民俗舞踊」部門において上演された原住民舞踊作品は、5年間毎年40以上あり、この部門の4分の1程度を占めた。

表1 「民俗舞踊」作品における原住民作品数

年	民俗舞踊	
	総作品数	原住民作品数
2013	162	45 (27.8%)
2014	169	40 (23.4%)
2015	174	46 (26.4%)
2016	177	44 (24.9%)
2017	174	41 (23.6%)

2. 上演人数

参加(上演)人数により、踊る場所が異なる。25人以上で踊る作品は、「体育館」の中に広い舞台を作って上演される。一方、25人未満の作品は、ホールの「舞台」で上演される。

表2は、民俗舞踊の上演人数別作品数とそのうちの原住民舞踊作品数を示している。「体育館」で踊る25人以上の作品は、どの年も30以上の作品が上演され、そのうち、原住民舞踊作品は、11～18作品であり、4分の一を超えている。25人未満の作品は、どの年も120作品を超え、そのうちほぼ2割が原住民舞踊作品となっている。

よって、原住民舞踊は多くの人数で踊られる傾向が高いことがわかる。

表2 「民俗舞踊」の参加人数別作品数と原住民作品数

年	25人以上の作品 (体育館)		25人未満の作品 (舞 台)	
	作品数	原住民作品数	作品数	原住民作品数
2013	36	18 (50.0%)	126	29 (23.0%)
2014	38	11 (28.9%)	131	30 (22.9%)
2015	34	14 (41.2%)	140	32 (22.9%)
2016	43	12 (27.9%)	134	29 (21.6%)
2017	35	12 (34.3%)	139	29 (20.1%)

3. 作品の分類

林明美(2003)²¹⁾は、原住民舞踊には、祭儀舞踊、生命礼儀舞踊、娯楽舞踊、があり、祭儀舞踊は、例えば、農耕祭事儀礼、除草、収穫、豊年、祈雨、祈晴、害虫駆除などであり、生命礼儀舞踊は、出生、命名、成年、結婚、葬祭など生命に関わるものであり、娯楽舞踊は、迎賓、酒宴、歓楽などである、としている。また、安子濱(2013)¹⁾は、台湾原住民音楽と舞踊は、生活と密接に関わっており、祭儀、生命礼俗、宗教信仰、神話伝説、家族と社会との結びつき、などと切り離せない関係にあるとしている。さらに、達西烏拉彎ら(2001)²⁸⁾は、タイヤル族の舞踊は、生活的、人文的、習俗的、娯乐的、歓乐的、伝統性的、勤勉的、宗教的な深い意義を持っているとする。

これらのことから、2013年～2017年の原住民舞踊作品（216作品）について、作品の題名や参加者が提出する作品のコメントを参考に、

「祭儀舞踊」：題名に「祭」の表記があるもの、民族の祭事に関連するもの

「生命・礼儀舞踊」：出生、命名、成年、結婚、葬祭等を表現したもの

「娯楽舞踊」：迎賓、酒宴、歓楽等を表現したもの

「伝説舞踊」：民族に伝わる神話や伝説を題材としたもの

の4つのカテゴリーに分類した。

1) 祭儀舞踊

2013年～2017年の作品数は48であった。作品名を図1に示す。作品の1つが写真3である。

「祭」、「布農祭典」2、「布農祭禮」、「阿美族祭典」、「女巫祭」、「巫祭」、「迎靈」、「泰雅禮讚」、「船祭」2、「火祭」、「海祭」、「傳 gaga 的生命祭儀」、「達悟族海祭」、「嬰兒祭」、「成年祭儀」4、「成年禮～追獵祖先的驕傲」、「Mimaqacuvungan 排灣成年禮讚」、「Bunun 生命禮讚」、「鹹首祭－榮耀戰士的靈魂」、「少年祭－mangayan-gayaw」、「成年禮 Pasat jakai」、「成年禮讚」、「火神祭」、「達悟海祭」、「Mikes 海祭」、「Parunang 船祭」、「祈雨祭」2、「驅疫祭」、「噶瑪蘭除瘟祭」、「阿美族捕魚祭」、「舞之祭慶豐年」、「射耳祭」2、「分享祭」、「祈豐收」2、「馬蘭年祭」、「卑南年祭」、「尋找 smyus—感恩祭」、「祭舞」、「舞之祭慶豐年」、「歡慶豐收小米祭」

図1 祭儀舞踊作品名



写真3 『阿美族捕魚祭（アミ族豐漁祭）』（2014）

2) 生命・礼儀舞踊

2013年～2017年の作品数は122であった。作品名を図2に示す。作品の1つが写真4である。

「泰雅舞風情」、「泰雅風情」、「泰雅勤」4、「泰雅・我的家」、「泰雅・Runpya 風情」、「小米豐收 口簧舞泰雅」、「tayal balay. 真正的泰獵人」、「泰雅部落勇士」、「Atayal balay~泰雅人 Atayal balay~泰雅人」、「Tayal balay 真正的泰雅人」、「部落傳承泰雅人」、「泰雅的祖訓」、「泰雅祖訓」、「舞動泰雅魂」、「戀戀泰雅」、「tminun Tayal」、「泰雅舞風勤」、「復薪泰雅」、「山林守護神布農族」、「Bunun 尋歸」、「賽德克風情」、「朝如白石賽德克」、「賽德克印記」、「編織賽德克」、「祖靈的庇佑（排灣族）」、「達格拉烏斯の子民」2、「神勇飛鄒」、「舞躍阿美情」、「震撼阿美」、「部落少年情」、「部落少女情」、「Sediq, Tayal 彩虹之子」、「Pakarongay（巴卡隆耐）」、「水蜜桃公主」、「弓族」、「勇士的榮譽」、「戰魂～英靈的印記」、「rekerekepan 伴」、「尋・初心」、「勇士禮讚」、「snaw sediq 勇士榮耀－融」、「舞・肯給納斯」、「墾給納斯」、「山迴・聚首」、「山之季」、「走山行」、「慶山海」、「百合、鷹揚大武山」、「大武山的精靈」、「拉號山水情 lakah ta laqi Rahaw」、「部落山海情」、「月光 追獵、彩虹」、「瞭望臺」2、「聚落情緣」、「部落舞風情」、「舞躍大地～頌 gaga（泰雅）」、「獵戀風聲」、「反璞歸真」、「遙想矮人・舞動貝神」、「太陽的子民」、「太陽之子」、「美麗大地的子民」、「舞動山海原鄉情」、「舞四季舞泰雅」、「部落風情」、「Kacalisiyan 斜坡上的人」、「山上的孩子」、「奇萊山腳下」、「Faloco' 心」、「liqu」、「根原」、「噶瑪蘭悠遠樂舞情」、「原融」、「感恩豐收泰雅勤」、「豐收的喜悅」、「慶豐收」、「歡樂慶豐收」、「豐收茁壯」2、「Malapaliw」、「出草、織布、慶禮讚」、「童趣樂」、「榮耀與祝福」、「找回 Lapatong」、「聲動部落」、「勇・征」、「舞動蓬萊_巴斯達隘」、「峽骨原情」、「綿延絲帶。大地禮讚」、「生命之歌」、「Vusam（種子）」、「根 pu'in」、「拓荒歲月敘戰舞」、「網」、「Msqrinaw（婚禮）」、「pucekel・布瓷榮」（排灣族貴族婚禮祭儀）」、「緣定情人袋（阿美族）」、「圖騰」、「甕之鄉」、「團」、「原鄉藝力美」、「祖靈的呼喚與吶喊」、「躍動的臀鈴、勇士、花環」、「薪傳之美」、「里漏部落風情」、「原鄉風情」、「原鄉八斗情」2、「入家」、「屋頂上祖靈的對話」、「靈火獵魂戰靈封」、「祖靈的編織」、「榮耀祖靈」、「紋面舞讚舞口簧」、「大羽冠 Tingpih」、「kakita'an 祖屋」

図2 生命・礼儀舞踊作品名



写真4 『Pakarongay (バカ隆耐)』(2014)

3) 娯楽舞踊

2013年～2017年の作品数は24であった。作品名を図3に示す。作品の1つが写真5である。

『歌舞歡騰迎豐收』、『阿美舞祭慶豐收阿美舞祭慶豐收』、『春之播種舞歌』、『漁家歡歌』、『Misarugiau (部落樂舞)』、『五月娉娉舞豐年』、『部落樂舞 - Misakeru』、『舞動八斗慶豐年』、『祈雨賜豐年』、『泰雅播種祭舞』、『Lipahkai a kero (阿美族快樂的舞蹈)』、『迎賓舞宴』、『迎賓舞』、『憶歡慶』、『Ma ka pa hay』、『阿美鬥舞』、『戰舞』、『戰舞傳奇2』、『良月星辰竹節舞』、『竹之禮讚 - 響鈴祭祖慶佳節』、『編織酒舞』、『竹舞豐收慶佳節』、『頌揚禮讚』

図3 娯楽舞踊作品名



写真5 『竹之禮讚 - 響鈴祭祖慶佳節』(2013)

4) 伝説舞踊

2013年～2017年の作品数は22であった。作品名を図4に示す。

『射日傳説』、『獵日』、『射・日』、『鄒族射日傳説』、『月桃之愛』、『源起不滅泰雅情』、『小米傳説』、『彩虹的守候』、『鄒楓之神話』、『雲端上的傳説』、『尋 ga ga』、『大洪水傳説』、『馬那邦山下的腳印』、『人蛇戀傳説 ~ 排灣篇』、『Kurakurau (孔雀珠之戀)』、『Ivut 美麗織紋的約定』、『聖鳥傳説』、『苡莉的編織』、『瓦旦的獵悟』、『愛與憶』、『布農的逆襲 - 抗日英雄拉荷阿雷』、『百合之戀』

図4 伝説舞踊作品名

216作品について、祭儀舞踊、生命・礼儀舞踊、娯楽舞踊、伝説舞踊の4つに分類することができた。そのうち出生、命名、成年、結婚、葬祭等を表現した「生命・礼儀舞踊」として分類される作品が多かった。

それぞれの作品名は、除草、収穫、豊年、祈雨、祈晴、害虫駆除などの農事、出生、命名、成年、結婚、葬祭など生命に関わるもの、迎賓、酒宴、娯楽などが如実に表現され、原住民の人々の生活と舞踊は密接に関わっていることが伺える。さらに、これらの作品創作を通して、児童生徒は、原住民の舞踊の生活的、人文的、習俗的、娯乐的、歡樂的、伝統性的、勤勉的、宗教性的な意義を理解することができるようになると考えられる。

IV まとめ

本研究では、近年の全国学生舞踊コンクールで上演された原住民舞踊作品に注目し、全体の作品の傾向(部門別、上演人数、作品の分類)を明らかにすることによって、コンクールにおける原住民舞踊作品の状況を把握することを目的とした。

その結果、

1. 「民俗舞踊」部門において上演された原住民舞踊作品は、5年間で毎年2～3割程度を占め、多人数で踊られる傾向であった。
2. 作品は、祭儀舞踊、生命・礼儀舞踊、娯楽舞踊、伝説舞踊の4つに分類することができた。そのうち出生、命名、成年、結婚、葬祭等を表現した「生命・礼儀舞踊」として分類される作品が多かった。また、これらの作品創作を通して、児童生徒は原

住民文化の理解を深めることができると考えられた。

以上のことから、近年の全国学生舞踊コンクール決勝大会の原住民舞踊作品は、5年間にわたり毎年2割以上の参加作品数があった。それらの作品は、民俗舞踊として原住民の各地域の祭儀、情景、物語、出来事等を表現している作品であることが確認され、作品創作を通して、児童生徒は、伝統文化について学ぶことができていると考えられた。

最後に、毎年、全国学生舞踊コンクールへの参加を目的として、新たな原住民舞踊作品が創作され上演されていることから、このコンクールの存在は、台湾の原住民舞踊の継承の重要な根拠の一つとなっているといえる。

V 今後の課題

本研究では、学生を対象としたコンクールの近年5年間の原住民舞踊作品の実態を明らかにすることに留まった。まずは、本稿を一資料とし、今後は、さらに対象を拡げ継続調査していくこととする。

また、原住民舞踊の歴史の変遷、舞踊教育における原住民舞踊の位置づけ、16の原住民におけるそれぞれの舞踊の特徴など、原住民舞踊をめぐる様々な視点から資料を構築し、台湾における原住民舞踊の継承と発展の様相を明らかにしていきたいと考える。

さらに、これらの資料を積み重ねることによって、日本の学校体育における「フォークダンス」の授業の在り方について検討したい。

注

1. 当時の台湾のリーダー蒋介石の長男である。
2. 蒋介石の『民生主義育樂兩篇補述』第三章第四節身体的康樂による。
3. 舞踊家李天民（1925-2007）は、1949年から原住民の地域に赴き、南の屏東県の三地門、花蓮県吉安郷の田浦部落、花蓮県秀林郷、台東県などの地域に住む、阿美族（アミ族）、布農族（ブヌン族）、排灣族（パイワン族）、卑南族（ブユマ族）などの原住民を訪ね、現地の住民の

舞踊を学び、中華民族舞踊コンクールのための原住民舞踊作品を創作していった。

4. 台湾降伏後、中華民国政府は、占領時の日本が「高砂族」と命名した原住民を漢語名で「高山族」または「山地人」と呼称するようになったため、かれらの民族舞踊は「山地舞」と呼ばれるようになった。実際、蘭嶼（台湾島東南海上の島）に住む達悟族（タオ族）を除き、台湾島の山地に居住している。
5. 「實施要點附件（一）舞踊類型補充說明一、古典舞：中華民族歴代之古典型式、且具有其傳統文化內涵與風格的舞蹈；含祭典舞蹈、宮廷舞蹈、禮儀舞蹈、戲曲舞蹈…等類。二、民俗舞：中華民族各地區的生活節慶、民風特色的舞蹈、含各民族節令舞蹈、郷土舞蹈、原住民舞蹈…等類。三、現代舞：以多元型式的技巧、表現現代人文思想、及反映當代社會風貌、意識、精神之創新風格的舞蹈。四、創造性兒童舞蹈以兒童為中心、引導兒童觀察生活環境及周遭事務、透過肢體探索呈現出來、形成具有童趣與創新思考的舞蹈。」

文献

- 1) 安子濱, 2013, 「原住民樂舞之舞台化探討 以國立東華大學原住民民族學院舞團為例」, 國立東華大學. 台東.
- 2) 張惠玲, 2007, 「桃園縣復興鄉國小學生對泰雅族 (Atayal) 舞踏學習滿意度調查研究」, 『全國原住民民族研究論文集』, 2-6: 1-16.
- 3) 張瓊方・頭川昭子, 2005, 「台湾で上演された中国古典武舞作品の特徴」, 『茨城健康スポーツ科学』, 23: 9-22.
- 4) 張瓊方・頭川昭子, 2006, 「台湾で上演された中国古典舞踊作品の特徴」, 『体育学研究』, 51(6): 737-756.
- 5) 張瓊方, 2007, 「中国舞踊の継承と展開 台湾における舞踊教育システムと舞踊表現」平成18年度筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士論文.
- 6) 江原孝史, 2017, 中学校武道必修化の問題と課題 特に剣道に焦点をあてて, 教育総合研究 1,209-1,221.
- 7) 教育部體育署, 2013, 「101 學年度舞踏風情全國學生舞踏比賽攝影專輯. 教育部體育署國立台灣師範大學體育研究與發展中心」, 台北.
- 8) 教育部體育署, 2014, 「102 學年度舞踏風情全國學生舞踏比賽攝影專輯. 教育部體育署國立台灣師範大學體育研究與發展中心」, 台北.
- 9) 教育部體育署, 2015, 「103 學年度舞踏風情全國學生舞踏比賽攝影專輯. 教育部體育署國立台灣. 師範大學體育研究

- 與發展中心」,台北。
- 10) 教育部師資培育及藝術教育司,「全國學生舞蹈比賽資訊網」,
https://studentdance.perdc.ntnu.edu.tw/dance_y2018/previous.php, (參照 2018.12.19).
 - 11) 國立彰化社會教育館, 1996, 「舞蹈風情 94 學年度全國學生舞蹈比賽攝影專輯」, 國立彰化社會教育館, 台灣彰化。
 - 12) 國立台灣師範大學體育研究與發展中心, 2013, 「101 學年度全國學生舞蹈比賽實施要點」, 台灣教育部。
 - 13) 國立台灣師範大學體育研究與發展中心, 2014, 「102 學年度全國學生舞蹈比賽實施要點」, 台灣教育部。
 - 14) 國立台灣師範大學體育研究與發展中心, 2015, 「103 學年度全國學生舞蹈比賽實施要點」, 台灣教育部。
 - 15) 國立台灣師範大學體育研究與發展中心, 2016, 「104 學年度全國學生舞蹈比賽實施要點」, 台灣教育部。
 - 16) 國立台灣師範大學體育研究與發展中心, 2017, 「105 學年度全國學生舞蹈比賽實施要點」, 台灣教育部。
 - 17) 木山慶子・張瓊方, 2016, 「台湾における教育課程の検討—体育の舞踊と芸術の舞踊を通して—」, 『群馬大学教科教育研究』, 15 : 39-48.
 - 18) 木山慶子・張瓊方, 2018, 「台湾舞踊教育における「舞踊クラス」の理念と現状」, 『身体運動文化研究』, 23(1) : 39-55.
 - 19) 李崇億, 2006, 「傳統知識法律保護之原理與模式」, 『台灣原住民族教育論叢』, 2 : 201-212.
 - 20) 李天民, 1988, 『舞踏藝術論』, 正中書局 : 台北, 146-147.
 - 21) 林明美, 2003, 『踏欣賞 : 台灣的民間舞蹈』, 三民書局 : 台北, 165.
 - 22) 呂鈺秀, 2003, 「台灣音樂史 : 原住民音樂」, 五南圖書出版社 : 台北, 235-374.
 - 23) 莊志強, 2014, 「泰雅族獵人養成之文化底蘊及其教育價值」, 國立東華大學, 台東。
 - 24) 薩古流巴瓦卡隆, 2006, 「祖靈賜與的寶物排灣族的陶壺」, 『台灣原住民族教育論叢』, 3 : 42-47.
 - 25) 譚昌國, 2006, 「神賜到人造 琉璃珠對排灣人的文化意義」, 『舞動民族教育精靈臺灣原住民族教育論叢』, 行政院原住民族委員會, 3 : 48-71.
 - 26) 伍湘芝, 2004, 「李天民—舞蹈荒原的墾拓者」, 行政院文化建設委員會, 台北。
 - 27) 白波瀨勇太, 2018, 「運動会・体育祭での発表を最終目標としないフォークダンスの授業実践」, 東京学芸大学研究紀要 54, : 195-202.
 - 28) 達西烏拉彎・畢馬, 2001, 『台灣原住民歌謠與舞蹈』, 武陵出版有限公司, 台北。
 - 29) 楊杜煜, 2003, 「台灣舞蹈表演藝術之發展與當代社會之關係 (1930 年代至 2000 年)」, 中央大學歷史研究所碩士論文。
 - 30) 頭川昭子・横山裕子・高橋うらら・張瓊方・島岡彰子・唐沢優江・三木綾子, 2003, 「国際創作舞踊コンクール受賞作品の外的イメージと内的イメージの関連」, 『身体運動文化研究』, 10(1) : 47.

